

参 考 文 献

- 1) 荒川季俊・田原寿一(1948): 気団ごよみ. 気象集誌. **26**, 201-202.
- 2) 気象庁(1959): 北半球 500mb 等圧面高度半旬平均値. 43p.
- 3) 気象庁予報部(1965): 季節予報資料 [季 444 の2] 31-44.
- 4) 倉嶋厚(1966): 日本の気候(古今書院) 253p.
- 5) 徐淑英・高由禱(1962): 東亜季風と季節. 「東亜季風の若干問題」88-103.
- 6) 須田建(1956): 1954年1月末の低温について. 研究時報 **8**, 226-232.
- 7) Suda, K. (1959): A study on the dynamic climatology of cold outbreaks in the Far East. Geoph. Mag. **29**, 413-461.
- 8) 高橋浩一郎(1955): 動気候学(岩波書店) 316p.
- 9) 吉野正敏(1967): 気圧配置型ごよみ(4) — 西高東低について—災害科学研究会プリント.
- 10) 吉野正敏・福岡義隆(1967): 半旬別の気圧配置ごよみ. 天気 **14**, 250-255.
- 11) 吉野正敏・菅沼繁(1967): 気圧配置型ごよみ(2)(1946-1955)改訂版. 災害科学研究会プリント.
- 12) 吉野正敏(1968a): 気候学(地人書館) 258p.
- 13) 吉野正敏(1986b): 東アジアの夏型気圧配置の出現状態およびその異常と気温分布. 地理学評論 **41** (12) 721-731.

= 新刊紹介 =

関口 武著 日本気象風土記

旺文社新書 252頁 250円

わが国では、あいさつの言葉一つをとつても、日常生活に及ぼす気象の影響の大きいことがわかれると言われている。そのためでもあろうか、日本の天気や気象に関する解説書や教養書は、これまでもかなりの数になる。しかし、わが国の気象の変化は時間的ばかりでなく、地域的にも極めて大きく、このような地域差が特色のある風土を作り出し、そこで育った人々に郷愁をよび起こさせているにもかかわらず、このような点を重視して記述された教養書は意外に少ない。一般の人は知らず知らず、自分自身の生活の場所が頭の中の主要な部分を占めているのではないだろうか。

本書では、この点を重視し、わが国を北日本・東日本・中央日本・西日本に四分し、それぞれの地域に関係なく、気象現象や天気図の見方などを解説している。たとえば、冬の季節風といっても、北日本と北陸以南とは若干その性質を異にするので、別々に取り扱うというような配慮がされていることが本書の第一の特徴である。

また単なる気象現象の羅列に止まらず、たとえば、北日本の冬の寒波を“ごしきぼっこ”の民話やこけしづく

りと結びつけ、さらに砂丘とそれを作り出したタマカゼの由来をとき、季節風と漁民文化を結びつけるというように、巧みに風土と気象を結びつけたところに本書の第二の特徴がある。しかも丑寅鬼門説・おぼろ月夜などの民間伝承や季語などに科学的解説を加えるばかりでなく、大気大循環や気象衛星に関する知見など新しい気象学の片鱗をも加えて、日本の気象風土記を通じて、気象学の一般教養を与える気象学の入門書としての配慮がなされている。ただ、頁数の割合に多くの内容を盛りこんだために、もう少し詳しい解説をほしいと感じる部分があるのは残念である。

本書の第三の特徴は読みやすいことである。旺文社新書という、学生一般を対象とする読物であるだけに、ユーモアのある砕けた文体で肩がこらず、まことに楽しく読める。したがって気象人の息抜きもよいが、気象学に全く無縁な一般の人々の教養書としてよく、また文科系を含めた大学教養コースのテキストとして使いやすい書物だと思ふ。

(河村 武)